

アールスメロンの高糖度のための適正葉数について

農業研究センター 農産園芸研究所 野菜部

研究のねらい

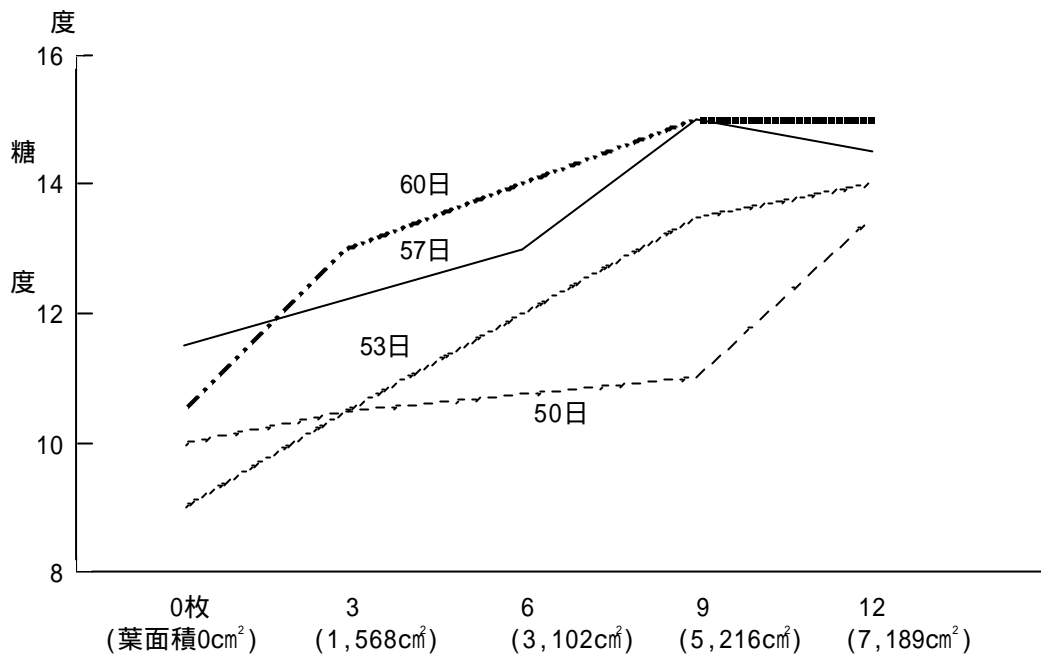
アールスメロンの収穫適期の外部判定は結果枝のマグネシウム欠乏症状と成熟日数によるのが一般的である。また直接には糖度検査を行うことで収穫時期を決定している。

しかし糖度のバラツキがかなり発生しているのが現状である。もしメロンを傷つけることなく全量を糖度検査ができれば、糖度保証あるいは収穫適期の判定もより確実になる。

そこで非破壊手法によって、全量を糖度検査するための基礎試験として、検量線作成の目的で、正常な果実肥大を行わせた後に、摘葉による果実の糖蓄積を阻害し、糖度のバラツキを生じさせた。その過程でアールスメロンの糖度の上昇経過と葉数(葉面積)との関係について検討した。

研究の成果

1. 11月収穫の作型で、セイヌ秋系を用い、果実が成熟期にはいる交配後40日に着果節(12~13節)より上部の葉を0、3、6、9、12枚に制限し、さらに成熟日数を50、53、57、60日に分けて収穫し、正常に肥大をした果実における糖蓄積について調査を行った。
2. 収穫期とされる57日目に出荷基準の糖度14度以上の果実を得るためには、着果上部葉数が9枚、葉面積では5200 cm^2 程度が適正葉数である。
3. 糖度と成熟日数の相関係数は0.6程度であるため、成熟日数のみで収穫期を決定することは糖度のバラツキが生じ易い。収穫時の正常な葉数や葉色等を考慮して、収穫期の決定及び収穫果の分別を行うことが糖度不足の果実の混入を防ぎ、品質の安定したアールスメロンの生産出荷につながる。



第1図 果肉胎座部の糖度に及ぼす着果上部葉数と成熟日数の影響

第1表 糖度と成熟日数との相関

	果こう部 B X	胎座部 B X	花おち部 B X
成熟日数	0.62	0.59	0.49

第2表 糖度、成熟日数及び葉との重相関

説明変数 (X_1, X_2) 目的変数 (Y)	成熟 + 着果上 日数 葉数	成熟 + 着果上 日数 葉面積	成熟 + 着果上部葉の 日数 グリーンメータ積
胎座部の B X	0.89	0.89	0.90